多職種連携	医療行動科学

［講義］　第４学年　前期　必修　2単位

《履修上の留意事項》遠隔授業のみ

《担当者名》准教授／松岡 紘史
准教授／金澤 潤一郎　准教授／本谷 亮

【概　要】
患者さんが抱える問題や医療に関連する問題の中には、これまでの一般的な医療の発想では解決できない問題がある。こうした問題に必要なのは、人間行動を総合的に解明し、予測、コントロールしようとする実証的経験科学である「行動科学」や健康と疾病に関する心理社会科学的、行動科学的、及び医学生物学的知見と技術を集積統合し、これらの知識と技術を病因の解明と疾病の予防、診断、治療及びリハビリテーションに応用していく「行動医学」の概念である。本講義では，行動科学、行動医学の基本的な概念について理解するとともに、歯科医療現場での応用方法について学習する。

【学習目標】
☆　行動科学の観点およびBio-psycho-social modelがなぜ医療の現場で必要であることを説明する。
☆　患者さんが訴える症状や問題を機能分析を用いて評価する。
☆　行動科学の基礎となる行動原理について説明する。
☆　患者さんと良好な関係を構築、維持するために必要なコミュニケーションスキルについて説明する。
☆　歯科で遭遇する問題に対して行動科学を適用する方法について説明する。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	オリエンテーション、医療行動科学とは何か。	行動科学及び行動医学の定義について学ぶとともに、なぜ、Bio-psycho-social modelが歯科医療の現場で必要か、心身相関の観点から学習する。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	松岡 紘史
2	症状の機能分析	行動科学の観点から、患者さんの訴えをどのように理解することができるか、その基本を学ぶ。特に、「症状の機能分析」の発想を学ぶ中から患者さんが訴える症状をどのように理解することができるか、その理論的枠組みを考える。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	金澤 潤一郎
3	症状の機能分析の実際：痛みについて考える。	患者さんが訴える痛みは心理学的な現象でもある。主観的痛みは外から見ることができず、患者さんが訴えて初めて理解できるものである。また、訴え方は人によって異なっている。そこで、舌痛症を例にとって行動科学の基本的発想を学ぶとともに、患者さんをよりよく理解するために必要な行動科学的な視点について学ぶ。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	松岡 紘史
4	行動原理：条件づけについて考える。（Ⅰ）（Ⅱ）	人間行動の理解の仕方について、心理学原理である古典的条件づけおよびオペラント条件づけについて学び、患者さんの症状を理解する理論的視点を考える。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	金澤 潤一郎
5	行動原理：認知について考える。（Ⅰ）	言語や思考過程（認知）が人間行動にどのように影響しているかを明らかにし、その機能を学習するとともに、患者さんの認知の特徴をどのように理解することができるかを学習する。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	本谷 亮
6	行動原理：認知について考える。（Ⅱ）	歯科を受診する患者さんの症状に特有の認知があるかどうかを考え、症状に及ぼす認知の機能を学習するとともに、患者さんにどのような援助ができるかを理論的に学習する。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	松岡 紘史
7	行動科学応用への基本となるコミュニケーションについて考える。	患者さんと良好な関係を構築、維持するために必要なコミュニケーションスキルについて学び、適切な患者	本谷 亮

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
		指導の方法と工夫について考える。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	
8	患者指導の実際（Ⅰ）：痛みと歯科心身症への対応を考える。	患者さんを指導する際に必要な行動変容の方法論について、具体的症例を通して学習する。特に、痛みを主体とする歯科心身症に関連する行動変容に焦点をあて、患者指導に当たって行動原理をどのように活用できるかを学ぶ。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	松岡 紘史
9	患者指導の実際（Ⅱ）：不安と歯科心身症への対応を考える。	患者さんを指導する際に必要な行動変容の方法論について、具体的症例を通して学習する。特に、不安を主体とする歯科心身症に関連する行動変容に焦点をあて、患者指導に当たって行動原理をどのように活用できるかを学ぶ。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	松岡 紘史
10	患者指導の実際（Ⅲ）：行動変容を阻害する要因について考える。（１）	患者さんの行動変容を促す際の阻害要因の１つであるうつ状態をとりあげ、気分状態が患者さんの健康行動に影響することを学習するとともに、うつ状態を評価する方法について学ぶ。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	松岡 紘史
11	患者指導の実際（Ⅳ）：行動変容を阻害する要因について考える。（２）	患者さんの行動変容を促す際の阻害する要因の１つである発達障害をとりあげ、患者さんの健康行動に対する影響を学習するとともに、発達障害の評価方法および対応方法について学ぶ。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	金澤 潤一郎
12	患者指導の実際（Ⅴ）：生活習慣の修正を考える。（１）（２）	患者さんを指導する際に必要な行動変容の方法論について、具体的症例を通して学習する。特に、糖尿病や肥満症に関連する日常生活習慣の修正に焦点をあて、患者指導に当たって行動原理をどのように活用できるかを学ぶ。 A-5-1)-①②③④⑤⑥⑦、B-3-2)-⑦⑧	本谷　亮
13	患者との良好なコミュニケーション（課題提出）	患者さんと良好な関係を構築，維持するために必要なコミュニケーションスキルについてまとめたレポートを提出	本谷 亮
14	発達障害への対応法（課題提出）	発達障がい傾向の高い方と接した時（患者さんや同僚等）に心掛けたいことや対応法についてまとめたレポートを提出	金澤　潤一郎
15	健康行動達成のための対応法（課題提出）	望ましい健康行動を達成するために，認知行動療法の観点からどのような対応が可能であるかについてまとめたレポートを提出	松岡 紘史

【評価方法】
◇　期末レポート（70%）、各講義で課されるレポート（30%）

【備　考】
教科書　：　毎回プリントを配付する。

参考書　：「実践家のための認知行動療法テクニックガイド」北大路書房
「歯科医師・歯科衛生士のための認知行動療法―チェアサイドで困ったときに」医歯薬出版

その他　：　レポートについて希望者にはフィードバックを行う。

【学習の準備】
☆　予習として、講義内で紹介される参考文献書籍等を積極的に活用し、関連する内容について理解する。（80分）
☆　復習として、配付されたプリントに基づいて、講義で取り上げられた概念等に関して理解を深めておく。（80分）

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】
DP1.人々のライフステージに応じた疾患の予防、診断および治療を実践するために基本的な医学、歯科医学、福祉の知識および歯科保健と歯科医療の技術を習得するために必要な知識を衛生学・公衆衛生学の観点から修得する（専門的実践能力）。
DP2.「患者中心の医療」を提供するために必要な高い倫理観、他者を思いやる豊かな人間性および優れたコミュニケーション能

力を衛生学・公衆衛生学の観点から身につける（プロフェッショナリズムとコミュニケーション能力）。
DP3.疾患の予防、診断および治療の新たなニーズに対応できるよう生涯にわたって自己研鑽し、継続して自己の専門領域を発展させる能力を衛生学・公衆衛生学の観点から身につける（自己研鑽力）。
DP4.多職種（保健・医療・福祉）と連携・協力しながら歯科医師の専門性を発揮し、患者中心の安全な医療を実践するために必要な知識を衛生学・公衆衛生学の観点から修得する（多職種が連携するチーム医療）。
DP5.歯科医療の専門家として、地域的および国際的な視野で活躍できる能力を身につけるために必要な知識を衛生学・公衆衛生学の観点から修得する（社会的貢献）。

【実務経験】
松岡紘史（臨床心理士）、金澤潤一郎（臨床心理士）、本谷　亮（臨床心理士）

【実務経験を活かした教育内容】
医療機関での実務経験を生かし、行動科学・行動医学を用いた患者対応への実際について講義を行う。